特集 若者たちから発信するメッセージ

邑楽町平和展

「戦争の中の子どもたち」

風化させてはならない事実がある。知っておかなければならない悲劇がある。邑楽町平和展では、毎年平和とは何かを問いかけるイベントを開催しています。今年のテーマは、「戦争の中の子どもたち」。太平洋戦争の渦中にいた子どもたちにスポットをあて、平和へのメッセージを織り交ぜた手作りのイベントを開催しました。

黙とうをささげる邑楽町平和展実行委員会の若者たち　「あたりまえのようにある平和も、願い続けなければ意味がない」とスタッフの一人は言います

「戦争の中の子どもたち」パネル展　太平洋戦争時の子どもたちにスポットをあて、写真パネルや当時の日用品などを展示。戦時中の子どもたちはどのような生活を送り、何を思って生き抜いたのかを伝えました。「何より親子連れで見てほしい」。そんな願いも込められていました

戦時中の遊び体験　戦時中の子どもの遊びを再現。時代とともに遊びは変わっても、笑顔は変わりません

メンコ

反戦や平和への思いを発信していく邑楽町平和展（以下、平和展）が9月8日に開催されました。町職員労働組合の青年たちでつくる邑楽町平和展実行委員会が毎年企画。今年で29回目を数えます。

今回のテーマは「戦争の中の子どもたち」。太平洋戦争の中で、子どもたちがどのような生活を送り、そして何を思って生き抜いたのか、貴重な資料をもとに平和へのメッセージを伝えました。

大多数の人たちは、日本がアメリカをはじめとした連合国と戦争をしていたことを、歴史の教科書で知るだけの「戦争を知らない世代」です。そんな世代に戦争の悲劇を知ってもらい、平和の尊さを再認識してもらいたいという願いが、この平和展には込められています。

平和展実行委員会委員長の森本賢太郎さんは、「町民の皆さん、そして未来を担う子どもたちに少しでも戦争の悲劇を知ってもらい、地域から平和への思いを発信していきたい」と話します。

その一環として、戦争の中で少年時代を過ごした3人の皆さん、森戸貢さん（坪谷・22区）、清水良訓さん（光善寺・15区）、中谷修さん（前原・4区）の講演会が開催されました。地域の人から戦争の話を聴くことが、戦争の悲劇を風化させない取り組みのひとつになりました。

平和展に来場した皆さんの目には、何が映ったのか、心には何が響いたのか…。終戦の日から67年。若者たちの発信する平和へのメッセージは、これからも続いていきます。

ペープサート（紙人形劇）　現在と戦時中との衣食住の違いを分かりやすく上演しました
※ペープサートは、表裏で違う絵を描いた紙人形をくるくる回して上演する人形劇です。

風船飛ばし
平和を願って来場者と風船飛ばしを行いました。願いの込められた風船は、大空へと舞い上がりました。親子で一緒に風船を飛ばす姿も見ることができました

「ちいちゃんのかげおくり（大きな絵本）」の展示
展示部門のスタッフが、手作りで作製した大きな絵本「ちいちゃんのかげおくり」。戦争の悲劇を絵本から知ってもらう取り組みとして企画。体をいっぱい使ってページをめくり、読んでもらいました

戦時食の無料配付　戦時中に食べられていた食事や、おやつを無料配付しました。調理法や調味料も当時のものを再現。配付されたのは「すいとん」と「里芋おはぎ」、そして「かりんとう」でした

すいとん

昆布・わかめ・ひじきなどの海草・塩が原料の代用しょうゆで、当時のすいとんを再現

里芋のおはぎ

戦時中に、もち米などの代わりに里芋を使っておはぎを作りました。かりんとうの材料は、干しうどんです

かりんとう

「地域から平和の輪を広げていきたいです」

邑楽町平和展実行委員会
委員長 **森本 賢太郎**さん

あたりまえにある「平和」の中で暮らしている私たちは、戦争を知りません。今ある平和は、過去に多くの人たちの犠牲のもとに築き上げられたものだと考えます。

平和展実行委員会では、過去の悲惨なできごとを、若い世代へ語り継いでいくための企画を毎年行っています。今回、戦争体験をされた皆さんによる貴重な講演会も開催できました。平和展に訪れた人たちが見聞きしたことを家に持ち帰り、家族と話しをすることで、平和についてもっと考えるきっかけを広げてほしいと思います。

今年で29回目を迎える平和展。今後は、もっと地域の人たちにも参加してもらい、地域の人たちと一丸となって、「平和への思い」を発信していきたいですね。

語り継ぐ【歴史の証言】

語り尽くせない過去がある。
語り継がなくてはならない真実がある。

若い世代に、未来を担う子どもたちに

語りべ 森戸貢さん「戦地からの手紙」 清水良訓さん「学徒動員」 中谷修さん「戦後の食糧難」

森戸 貢さん（坪谷・22区）

亡き叔父さんのあの笑顔を忘れることができません。

昭和15年、私が小学校3年生の時、叔父さん（森戸茂さん）は飛行機の整備兵として召集され、千葉県の飛行連隊に所属することになりました。日中戦争が長期化、戦線が拡大するにつれ、叔父さんの部隊も中国方面へ派遣されることになったのです。

昭和16年12月8日未明。ラジオから「帝国陸海軍部隊は本八日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」という太平洋戦争勃発の臨時ニュースが流れました。中国と戦争をしているのに、もっと大きな戦争になってしまったなと、当時の私の心には大きな不安ばかりが宿りました。

叔父さんの部隊も赤道直下のスマトラ島に派遣され、その後ジャワ島に進軍。叔父さんは同島にて兵役満了になり、日本に帰還できるはずでした。兵役満了の連絡を受け、祖父母はじめ家族一同喜んでいました。

ところが、昭和18年中ごろから戦闘が激化し、帰還は突如延期となってしまいました。家族へのみやげ物などをトランクに詰め込み、帰還の日を一日千秋の思いで待っていた叔父さん。その故郷への望郷の念、家族との再会の喜びを断絶されてしまった断腸の思い、その絶望を思うと今でも涙が止まりません。

その後、部隊はジャワ島から激戦続くニューギニア島へと派遣されました。手紙は、「ウエワク飛行場に来襲せる敵機の大編隊、爆弾の音、高射砲の発煙に明け暮れ実に壮烈なる戦闘が繰り返されております。飛行場には物資などは、ほとんどなくなり食べ物は木の葉、草の根のありさまでした」と戦場のすさまじさを伝える文面でした。

戦地からの手紙は、叔父さんと同じ部隊の太田市出身の金田兵長さんより持たらされました。少尉候補生として合格し、内地（日本）に一時帰還するというので、その際叔父さんから故郷の両親へ渡してほしいと、託されたのでした。

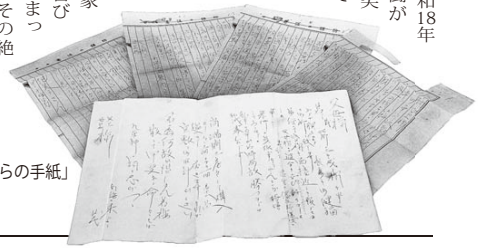
手紙には、「茂が戦場の土となるようなことがあらば、冥土よりご両親様の長寿と、ご建福をお祈りします。（中略）私事に争いぬ時局故、勝つまでは滅私奉公です」とあり、「君の為何故か惜しまん 若桜 散りて甲斐ある命なりせば ―九軍神の詞を忍びつ―父上母上様 茂」と最後に締めくくられておりました。

昭和19年9月16日、叔父さんは東部ニューギニアのセビック州マダイで戦死。24歳の若さでこの世を去りました。出征後一度も会えないまま戦死の知らせを聞いて、家族一同悲しみに暮れました。

たとえ叔父さんの身は、遠く南方の地ニューギニアに眠っていようとも魂はわが家、そして両親のもとへしっかりと戻ってきています。戦地からの手紙は、叔父さんの魂そのものなのです。仏壇にお供えして毎日ご冥福をお祈りしております。

たこ揚げや魚取りなど私と一緒に遊んでくれたときの、あのやさしい叔父さんの笑顔を今でも忘れることができません。

もし、この戦争がなかったなら、やさしく責任感のある叔父さんは、素晴らしい家庭を築き、お子さんやお孫さんたちに囲まれて平和な家庭の主として、長寿を全うしたのに、幸せな人生を送ることができたのに…と思えてなりません。



「戦地からの手紙」

●東部ニューギニア戦線
日本軍は、昭和17年3月より東部ニューギニアの要地攻略と占領を目指して上陸を開始。連合国軍との間に激しい戦闘が繰り広げられました。しかし、制海権と制空権を失った日本軍は、補給を断たれ孤立し、飢えとマラリアなどに苦しめられたといいます。戦闘は、昭和20年8月15日の終戦まで続きました

清水 良訓さん（光善寺・15区）

学生が戦争の道具にされるこんな悲しいことはない。

私は、昭和5年に生まれました。その翌年には満州事変、昭和12年には日中戦争が勃発。昭和16年には、太平洋戦争が始まりました。私は戦争の中で育ってきたといっても過言ではありません。必死に生きて、気がついたときには、終戦を迎えていました。

当時は、庶民の間でも戦時色が色濃く、皆さんと一緒のことができないと「非国民」と言われた時代。民間の工場は、軍部の統制のもと軍需工場として徴用され、米も穀類を残したほか、すべて供出させられました。戦争が激化するにつれ兵器に使う鉄も不足。なべや、やかんまで供出させられました。そして、ほとんどの物が配給制となり、切符と交換して手に入れていました。砂糖やみそ、しょうゆにマッチまで切符と交換。終戦近くなると、交換する物すらなくなっていきました。

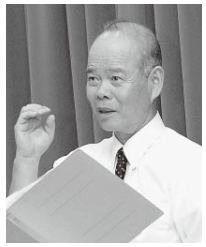
昭和19年11月、国民学校高等科（現在の中学校に相当）の15歳のとき、私は大泉の工場へと学徒動員されました。学徒動員は、工場などの労働力不足を補うために昭和19年ごろから始まりました。

工場には定期的にアメリカのB29爆撃機が来襲してきて、激しい爆撃をしていきました。逃げるのが精一杯。警戒警報が鳴ると、学徒が一番先に逃がされました。太田工場が爆撃され、大泉工場は機銃掃射されました。戦闘機は一列になって突っ込んでくるので、本当に恐ろしかったです。急降下してくる戦闘機のパイロットが見えたと言う人もいます。

昭和20年8月15日のお昼ごろ、終戦を伝える天皇陛下の玉音放送をラジオのある家庭に集まって、みんなで聞きました。その時、初めて天皇陛下の声を聞きました。「堪えがたきを堪え、忍びがたきを忍び…」。この二つのフレーズだけは、今でも忘れることができません。

勉強がしたかった。でもできなかった…戦争で。ノートもない。習字をする半紙もない。ただ新聞紙に真っ黒になるまで書いていた…。

今考えると、戦争であんな苦労した学生時代が、いったい何のためだったのか、分からなくなります。戦争はしないほうがいい。絶対にしてはいけない。知恵を使って避けたほうがいい、私はあの戦争を経験したから思えるのです。



中谷 修さん（前原・4区）

あの食糧難を乗り越えて今の日本があると思います。

終戦を迎えた日、私はわずか5歳でした。実家は、和歌山県の高野山と海南市のちょうど中間に当たる山間地にあり、材木を扱う商売を営んでおりました。終戦まで海南市から3～5歳の親戚の子どもたちも、わが家へ、疎開をしていました。

食べるものが本当になくて、子どもたちのケンカの原因のほとんどは食べ物でした。兄弟同士でとっくみあいのケンカになることもありました。「食べ物が原因で、小さい子どもが大きなケンカをすることほど、母親にとって辛いことはない」と後年母は言っておりました。

私の母は、父の仕事を手伝ってくれる隣近所の人の子どもたちの面倒も見ていました。当時、朝食・夕食は「おかゆさん」といってご飯にお茶を入れて塩をまぶしたり、あるいはさつま芋を入れたりした食事が食卓に出されていました。昼は麦ご飯で、この時は大変なごちそうでした。

疎開している子どもたちがケンカしていても麦ご飯をあげると、うそのように泣き止み仲直りしたと当時を振り返り、母は話していたのを記憶しています。

食事の時、母は麦ご飯を決まってお茶碗に一膳とっておきました。戦後間もないころでしたが、わが家の前を高野山参りの人が通っていきました。その人たちの中には、「奥さんお茶を一杯もらえるかね」と言って尋ねて来る人もいれば、まだご飯を食べていないという人もいました。そんな時母は、とっておいた麦ご飯を差し上げていたのです。子どもながらに見ていたその光景を、今でも忘れることができません。

こうした食糧難の時代も昭和24年ごろには一応の解決をみたようですが、なぜ、食料難となった期間があったのか、大きな要因が3つあると私は思います。

①GHQが食料支援をしなかった▽日本が食料を隠し持っていて地上戦を行うのではないかとの警戒があった②人口増加▽昭和20～25年に約1、200万人増加（外地から日本に戻ってきた人の割合が半分）に伴う食料不足③自然災害が多発▽福井地震や枕崎に上陸した台風など

終戦間もない何もない時代から驚異的な発展を遂げた日本。昭和20年代は、今ある日本の原点だと私は思います。